

# なぜ TEACCH なのか

—TEACCH の考え方—

Why TEACCH is Necessary for Education of Students with Autism Spectrum Disorders? :  
The TEACCH Concept

諏訪 利明\*<sup>1</sup> 小田桐 早苗\*<sup>1</sup>

## 要 旨

TEACCH Autism Program (以下, TEACCH) は、アメリカ・ノースカロライナ州で採用されている自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) 支援のシステムである。TEACCH についてまず整理し、その制度の哲学について述べる。さらに教育方略としてのストラクチャードティーチングの考え方と、その方略が生まれた背景である ASD の認知特性、つまり学習スタイルについて詳述する。最後に支援の在り方について、TEACCH のコアバリューから、共生と多様性、さらに公正さを担保することの重要性について説明する。

Keywords : TEACCH Autism Program, 学習スタイル, 公正さ, 通常学級  
TEACCH Autism Program, learning styles, equity, general education classroom.

## 1. はじめに

通常学級の中にいる発達障害の疑われる児童生徒の数は増えている。発達障害の中でも、とりわけ自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) の児童生徒は、その特性があるがゆえに、さまざまな環境の影響を受けやすいことが知られている。そうした彼らが通常学級の環境の中で、他の生徒と同じように学ぶためには、さまざまな視点から支援を必要としていることは明らかである。こうした視点の一つとして TEACCH をどのように生かすことができるだろうか？

本稿の目的は TEACCH の考え方を整理し、小学校における ASD 児の支援をするにあたりどのような視点が大切になるかを明らかにし、教育の中に TEACCH の視点を持ち込むことの意義を述べることである。

## 2. TEACCH とは何か

TEACCH とは Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children のそれぞれの単語の頭文字をとって表記される言葉である。

日本語では、「自閉症および関連するコミュニケーション障害児の教育と訓練」と訳されている<sup>1)</sup>。

---

\*<sup>1</sup> 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
社会連携センター TEACCH Autism Program

TEACCHは、エリック・ショプラー博士を中心とした1960年代の研究から始まっている。当初は数カ所での実践だったTEACCHが、その後、州内に熱狂的に受け入れられ、1972年にはアメリカ・ノースカロライナ州のASD支援のシステムとして採用されることになった。最初のセンターが活動を始めたのはその年の7月20日で、昨年で50周年を迎えた。

現在では、州全体が7つのエリアに分けられており、それぞれにTEACCHセンターが置かれ、生涯にわたるASD者支援を展開している。

TEACCHの創設者である、エリック・ショプラー博士の功績としては二つのことが挙げられる。

一つは、まだ多くの専門家が自閉症の原因について暗中模索でいた時代に、早い段階から、ASDの脳機能に注目して、治療教育を考えたことである。ここでいう治療とは「治す」ことではない。原語では「Treatment」であり、これはASDの「良さを引き出す」ということである。もう一つは教育であり、原語では「Education」である。ASDの人の脳機能に合わせた教育の必要性をうたっている。

二つ目は、家族の立場の転換である。エリック・ショプラー博士は、それまで原因の一つとも考えられていた家族の立場を一変させた。そうではなくて、家族は育てにくい子どもを授かってしまったことで、支援を必要としている人たちであるということ、彼は積極的に主張した。

その後、ゲーリー・メジボフ教授が統括ディレクターを引継ぎ、現在は、ローラ・クリンガー博士が全体の統括ディレクターを務めている。彼女は2012年に組織改革を行い、それまでのDivision TEACCHという名称からTEACCH Autism Programと改称した。

### 3. TEACCHの哲学

TEACCHの中に生きている哲学としては4つのキーワードが挙げられている<sup>2)</sup>。

一つ目は「ユニークな学習スタイル」である。それは、ASDを脳機能の障害として定義することから見えてくる、周囲の大多数の人たちとは違うASDの人たちの、脳の認知機能のことである。そのことを「学習スタイル」と呼んで、ASDの人たちのとらえ方に合わせて情報提供していくという考え方である。ASDを変えるのではなく、その人たちの一人一人によりそう考え方である。

二つ目は「家族との協働」である。協働とは、Friend and Cook (2007)<sup>2)</sup>によれば、少なくとも2人対等なパートナーが、共通の目標に向かって、自発的に意思決定を共有しながら、直接的な相互作用を行うスタイルである、と定義されている。対等である、ということの意味は、専門家から家族に対して常に一方的に情報が与えられる関係ではなくて、家族の話を傾聴することでさまざまな情報を得て活かしていく、つまり家族から学ぶ姿勢の重要性を含んでいる。家族と専門家が、ASD当事者を中心にした本人の教育や成長のためのゴールを共有しながら、さらに自発的にコミュニケーションできる関係が求められているということではないか、と考えられる。

三つめは「全人的視点」である。英語では *holistic* という言葉があたるが、その意味として、内山<sup>3)</sup>は、「(ASD 支援において) それぞれの専門家が自分の見地だけから支援の方法を考えると誤解が生じやすい。(中略) 全体像をつかんで支援することが大切になる」と述べている。こうした専門家の姿勢として TEACCH がいう「ジェネラリスト」という言葉についても「スペシャリストであると同時にその子どもを全体として理解しかかわることができるジェネラリストである必要がある」と述べている。長崎ら<sup>4)</sup>は、現在 TEACCH で使われている「ASD スペシャリスト」という用語について、TEACCH スタッフに対するインタビューから「従来の専門性ではなく、ASD 児を一人の人として＜全人的な人間観＞によって捉えるということと深い関係がある」と分析している。そしてさらに「専門や資格に関係なく、ASD 児に対しての知識と技術、そして TEACCH の哲学を学び、実践できる人」と定義している。

四つ目は「ストラクチャードティーチング (構造化された教育)」である。学習スタイルを支援するためにどのような工夫をして教育していくのか。ASD の人たちの学習スタイルに合わせて、正しく意図が伝わるように、教室環境を含めさまざまな工夫をして、教育がかみ合うための基本として取り入れるべき考え方である。

教育の現場では、このうちの「ユニークな学習スタイル」の理解とそれに基づく教育方略である「ストラクチャードティーチング」の運用がとりわけ重要であると思われる。一人一人の子どもたちの学習スタイルに合わせて教育指導がなされる必要があるからである。

#### 4. ASD の学習スタイル

ASD の学習スタイルとは何か？

ASD の学習スタイルとして、TEACCH では、ASD の教育のためにまず理解すべき ASD の認知特性として 5 つのキーワードを挙げている<sup>2)</sup>。

一つは、「暗黙的学習」である。ASD の人たちは、学習する人たちであるが、その学習の仕方には特徴があって、明示的、具体的な情報は学ぶことができるが、暗黙的な情報を学ぶことの難しさをもっている。そのため、授業の中でも、常に明示的な情報提供が必要である。

二つ目は「聴覚情報処理」である。ASD の人は、聴覚情報の処理にはしばしば時間がかかることが特徴である。アメリカの有名な ASD 者であるテンプル・グランディンはその著書の中で、「視覚的に学ぶ」ということを強調しており、彼らの学び方が独特であることを述べている。これも教室の中で学習を進める上で、配慮が必要なところであろうと思われる。

三つめは「注意」である。彼らの注意の向け方には特徴があり、一つ目の特徴は狭い、「ビームのような」というたとえがあるが、かれらの注意の向け方は全体ではなく、細部に向かう。このことは強みでもあるが、時に、全体を見ることができないために意味をくみ取れず、意味を取り違えてしまうことも多い。さらに、そうした細部からの情報をまとめることも苦手である。そのために具体的な思考になりやすく、なかなか抽象的に考えることが難しい。しかも二つ目の特徴として、「スティッキーな」という言葉があるが、いったんどこかに注

意が向いてしまうと、そこから離れることができない。いわば切り替えることができなくて、ずっとそこに注意を向け続けてしまう、ということがある。そのため、日常生活の中では、やっていることを終わりにすることができなかつたり、なかなか次の活動に注意を向けることができなかったりする。この点の難しさを理解して支援することが重要であろう。

四つ目は「実行機能」である。実行機能とは、活動を計画だてたり、計画通りに取り組んだりすることである。また状況をきちんと整理整頓したりすることなども含まれる。活動があったら、その活動を開始すること、そして継続的に進行させて、最後まできっちり完遂させることは、どれも実行機能の働きと考えることができる。このことは時間のマネジメントとも関連する。しかし、ASDの人たちは、活動の中でこの実行機能を作用させることに問題があるというのである。

日常生活を送る時にはまさに実行機能が問われることが多く、この苦手さにうまく支援がかみ合わないと、ASDの人は、生活のいろいろなところで失敗を繰り返してしまうことになる。期待される内容を最後まできちんと完了するためにも、活動の枠組みや見通しをわかりやすく提供しないと、実行機能の弱さによって、できるはずのことでも取り組めない、ということが当たり前起きてしまうことになるだろう。

五つ目は「社会的認知」である。「心の理論」でも説明されるが、ASDの人たちは他者の視点に立つことが難しい。自分の見ていることはわかっても、その自分を他者がどのように見ているか、また自分と他者が違う考え方をするかもしれない、ということ、さらにはそうした視点を想像して自分の行動を決定するということが非常に難しい場合がある、というわけである。このことは対人関係やコミュニケーション、社会的行動の中で、トラブルになりやすいASDの人たちの背景にもなっている。本人がとらえにくい社会的状況や対人的なふるまいなどは、具体的に明示するソーシャルストーリーやコミック会話といった視覚的な方略をとって教えていくことが重要であろう。従来のような「教育指導」といった場面に、ASDの人にとってわかりやすい方略を取り入れていくことが重要であろう。

こうした学習スタイルは単なる違いであって、劣っているわけではないということを支援者は知っておくことが重要である。ASDの人たちがそういう学び方をする人たちであるということが明らかになった今、そうした彼らにとって学びやすい環境をどのように準備していくか、ということは喫緊の課題であるといえるだろう。

## 5. TEACCHのコアバリューから

最後にTEACCHのコアバリューについて整理しておきたい。

コアバリューとは、TEACCHで働く人たちの大切にすべき考え方を示したものであり、TEACCHで働く人たちの総意でまとめられているものである<sup>6)</sup>。

一つ目は「Commitment」であり、「他者の生活に前向きな変化が産み出せるように献身的に取り組む」ことがうたわれている。

二つ目は「Collaboration」であり、前述の「協働」である。この時に、大切な姿勢として

「互いを尊敬し、価値を認め、パートナーシップの文化を生み出す」とされている。

三つ目は「Excellence」であり、「革新的に素早い実践を通して卓越さを届ける」とされている。ASD への関わりに対しては「エビデンス」の間われる時代になっている。TEACCH の方法論であるストラクチャーティーチングの概要の中にも「視覚的な構造」に足して、「その他のエビデンスのある方略」を取り入れることの重要性が述べられている。こうした方略を ASD の人たちに合わせて提供していく、統合化の考え方の必要性を TEACCH では強調している。

四つ目は「Strengths」である。ASD の人たちの学習スタイルは、決してマイナス点ではなくて、「ユニークな強み」であるにとらえること、そして、そのことによって、さまざまな方略が産み出されていることも知っておくべきであろう。

五つ目は「Continuous Lifelong Learning」であり、ASD の人たちだけではなく、その ASD の人を取り巻く支援者たちも、生涯学び続けることの重要性がうたわれている。

最初はこれら 5 つだったが、コロナ禍の中、六つ目として付け加えられたのが、「Inclusion, Diversity, and Equity」である。訳すなら「共生」「多様性」「公正さ」を促進するよう社会に働きかけるという言葉になる。

日本でも「共生社会」が叫ばれて久しい。教育では「インクルージョン教育」という言葉がある。従来のように、障害に合わせて分けていく教育ではなく、皆で共に学んでいく教育の在り方が模索されている。そうした中で最近では「多様性」を声高に叫ぶ風潮もあり、一人一人を大切にする金子みすずの詩の一節「みんなちがってみんないい」という言葉もあちこちで目にするようになった。

しかし、まだまだ理解が必要であると感じるのは、最後の「公正さ」という言葉である。みんなで「共に生きる」ために「一人一人の違いを認めあう」ことは重要なことである。そうした違いを理解して支援していこうという流れも生まれてきている。「特別支援教育」という言葉もまさにそうした考え方の中から生まれているといえる。通常学級の中にも学習体制を整えるために支援が必要な子どもたちがいる、というこの考え方は、「公正さ」という言葉に担保されて、初めて最終的な支援の着地点を見出すといってもよい。

つまり社会の中では、違いのある一人一人が「公正な」スタートを切るために、それぞれに合わせた支援が必要とされる、ということである。

支援が必要である、という理解は社会の中で進んできたと思われる。しかし、その支援が平等でなければいけない、と感じる人はまだまだ多いと思われる。確かに支援を提供したことで助かる人は増える。しかし、平等な支援にこだわるあまり、より多くの支援を必要としている子どもはやはり不十分なままになってしまう、ということが起こる。本来なら 10 の支援が必要な子どもがいたとして、でもみんな平等に 3 までの支援しかできない、というのであれば、一体なんのための支援なのだろうか。一方、平等な支援だから、といってすべての子どもたちが支援を必要としているわけでもない。支援が平等である必要は、全くないといえるだろう。

ASD の子どもたちは、ASD であるからこそ、皆で一緒に教室で授業を受けようとする、支援が必要になる。そうした支援を受けて、やっとみんなと同じように教室で勉強ができるようになるのかもしれない。ASD であることを誰も理解してくれない、ましてや学習スタイルの違いがあることもわかってもらえない、そんな不平等な状態におかれている子どもが正しく教育を経験できるか、といったらそうではないのは明白であろう。そんな彼らを公正な状況に保つためにも、TEACCH の教育方略である「ストラクチャードティーチング」の工夫が教室に準備されることが必要であろう。

## 6. おわりに

TEACCH の方略であるストラクチャードティーチングは、ASD の学習スタイルをどのように支援するか、ということに基づいて開発されてきたものである。

ASD の人たちの教育を受ける権利を保証する意味でも、また教育上の不平等を生まないためにも、彼らのユニークな学習スタイルを理解し、それに基づいた教育上の工夫をさらに凝らしていくことが、TEACCH が伝える重要な課題であると思われる。

## 文 献

- 1) 服巻智子, 服巻繁 (2007) : 自閉症スペクトラム障害の人へのトータル・アプローチ TEACCH とは何か, エンパワメント研究所, p.8
- 2) TEACCH Autism Program, TEACCH と自閉症の学習スタイル, TEACCH ファンダメンタルトレーニング 2023 テキスト, 2023
- 3) Cook, L. and Friend, M. (2007), Educational Leadership for Teacher Collaboration, ERIC, Chapter14
- 4) 内山登紀夫 (2007) : 本当の TEACCH—自分が自分であるために—, 学習研究社, pp.23-24
- 5) 長崎和則, 小田桐早苗, 諏訪利明, 山本茜, 進藤貴子, 荒井佐和子, 岡野維新 (2023) : 地域包括ケアのために求められる TEACCH プログラムと心理教育, ソーシャルワークの連携・協働に関する研究—ノースカロライナにおける取り組みを踏まえた日本への普及に向けて—, 川崎医療福祉研究報告書, p.22
- 6) TEACCH Autism Program HP, (掲載確認 2023 年 10 月 4 日)  
<https://teacch.com/about-us/mission-st/>

(2023 年 9 月 29 日 受理)